中国古典文学大系 48

三俠五義

石玉崑 述　鳥居久靖 訳

平凡社

訳者紹介

鳥居久靖（とりいひさやす）　1911年愛知県生。1973年没。立命館大学文学部卒。元天理大学教授。専攻　中国語・中国文学。主著訳書　『華語助動詞の研究』（養徳社）『西遊記』（平凡社「中国古典文学全集」共訳）『水滸後伝』（平凡社「東洋文庫」）

中国古典文学大系　全60巻

三侠五義　第48巻

1970年7月4日　初版第1刷発行
1984年12月15日　初版第9刷発行

訳者　鳥居久靖

発行者　東京都千代田区三番町5番地　下中邦彦

発行所　郵便番号　102　東京都千代田区三番町5番地　振替・東京8-29639　株式会社　平凡社

不良本のお取換えは直接読者サービス係までお送り下さい（送料は小社で負担します）。
定価は外箱に表示してあります。

印刷　東洋印刷株式会社
製本　株式会社　石津製本所

© 株式会社　平凡社　1970　Printed in Japan

目　次

第一回……三
劉妃が陰謀を設けて李妃を陷れること
余忠が替わりに死して李妃を救うこと
第二回……三
包懐が夢に奎星を見て忠良を生むこと
包拯が長兄に助けられ志を立つること
第三回……三
包拯と展昭とが初めて相逢うこと
包拯が任官して難案を断ずること
第四回……三
包拯が罷免され高僧に救われること
包拯が再任され公孫策を登用すること
第五回……四
包拯が陳州救恤に勅遣されること
展昭が龐昱邸の内偵を試みること
第六回……五
白玉堂が安平鎮にてひとり義を行なうこと
展昭と白玉堂とが二人して金を分かつこと
第七回……五
展昭が刺客の捕縛に力をかすこと
龐昱が捕われ初めて御刑にあうこと
第八回……六
李妃が包公に往事を訴えること
仁宗がはじめて生母を認ること
第九回……七
郭槐が計にかかって断罪にあうこと
包公が再び奇しき病にたおれること
第十回……八
南俠が包公の奇病をすくうこと
展昭が武芸を天覧に供すること

第十一回……八八
丁兆蕙が入水せる老人を救うこと
展昭が丁兆蕙とはじめて相逢うこと
第十二回……九七
丁兆蕙が茶舗にて鄭新より盗むこと
展昭が剣をくらべて婚を結ぶこと
第十三回……一〇五
南侠展昭が五鼠のひとり盧方を識ること
顔査散が上京の途次金懋叔と相知ること
第十四回……一一五
顔査散が金懋叔と兄弟の盟を結ぶこと
三鼠が五弟を逐って都におもむくこと
第十五回……一二三
白玉堂が禁裏に潜入殺人を行なうこと
英雄が花神廟にて難女を救うこと
第十六回……一三三
盧方が義弟を捜して京へのぼること
展昭が府庁にて三鼠とたたかうこと
第十七回……一四〇
蔣平が韓彰の秘薬をだまし取ること
三鼠が技を試み官に封ぜられること
第十八回……一五〇
白玉堂が府庁の三宝を盗み取ること
蔣平が張竜・趙虎の危難を救うこと
第十九回……一五九
包世栄が恩情に感じて婚約すること
南侠展昭が陥空島におもむくこと
第二十回……一六八
展昭が白玉堂の詭計に陥ること
丁兄弟が妹壻の危難を知ること
第二十一回……一七五
丁兆蘭が白玉堂に軟禁されること
丁兆蕙が展昭の救助におもむくこと
第二十二回……一八四
兆蕙らが三宝を奪還玉堂を走らすこと
蔣平が玉堂をとらえて説服すること
第二十三回……一九三
白玉堂が四級護衛に任ぜられること
丁兆蘭が北侠欧陽春と邂逅すること
第二十四回……二〇二
北侠欧陽春が丁兆蘭の難を救うこと
韓彰が銀を盗んで悪党を驚かすこと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第二十五回……二〇九
韓彰が仇敵花蝴蝶とわたりあうこと
蔣平が鉄嶺観にて悪道士を刺すこと
第二十六回……二一八
蔣平が桑花鎮にて韓彰と邂逅すること
北俠が約にしたがい信陽に立つこと
第二十七回……二二六
竜濤らが花蝶を追って河神廟に集うこと
花蝶が宝灯をねらって危機に陥ること
第二十八回……二三四
蔣平が鄧家堡にて危機に陥ること
韓彰らが一致して花蝶を捕えること
第二十九回……二四二
花蝶が法に服し展昭が婚儀をあげること
倪継祖が発奮して杭州太守を拝すること
第三十回……二五〇
馬強が翟老人の孫娘を強奪すること
倪継祖が覇王荘を内偵し捕われること
第三十一回……二五九
朱絳貞がひそかに倪太守を救出すること
賀豹が北俠をわが家にともなうこと
第三十二回……二六八
倪太守が再び捕われ北俠に救われること
北俠が倪太守を助けて馬強を捕えること
第三十三回……二七七
倪太守が任を解かれ京師に召還されること
白玉堂が北俠逮捕に杭州へ勅派されること
第三十四回……二八五
白玉堂が北俠と出会い勝負を競うこと
双俠が玉堂のために和解の労をとること
第三十五回……二九四
智化が九竜冠盗出の計を立てること
智化が土工を装い禁裏をさぐること
第三十六回……三〇三
智化が宝蔵から九竜冠を盗み取ること
艾虎が京におもむき直訴におよぶこと
第三十七回……三一一
馬朝賢が合同審理にかけられること
艾虎が馬総監らと対決させられること
第三十八回……三一〇
総監馬朝賢と馬強とが罪に服すること
白玉堂が治水に赴き水賊を捕えること

第三十九回……三二七
公孫策が水難にあい毛秀に救われること
蔣平が湖岸にて賊魁鄔沢をとらえること
第四十回……三三五
毛父子が治水の功により官を授かること
蔣平が北俠を訪ねる途次艾虎と会うこと
第四十一回……三四二
蔣平が人を救うて艾虎とはぐれること
艾虎が盗食して施俊にめぐりあうこと
第四十二回……三五〇
錦箋と佳蕙とが主の取持をはかること
牡丹が奸計に陥り自害を迫られること
第四十三回……三五九
牡丹が家を逃れて水賊にあうこと
張立が牡丹を救い養女とすること
第四十四回……三六六
艾虎が葛瑤明の詭計におちいること
鳳仙・秋葵姉妹が艾虎を救うこと
第四十五回……三七四
鉄面金剛沙竜が艾虎に目をかけること
艾虎が師傅を訪ねて襄陽に立つこと
第四十六回……三八一
蔣平が李平山と賊船に乗り合わすこと
巧娘が間夫して溺死させられること
第四十七回……三九一
金輝が藍驍に襲われ娘と再会すること
北俠らが沙竜を救い藍驍を捕えること
第四十八回……四〇三
艾虎が刺客を追って長沙に赴くこと
智化がたすけて刺客を逮捕すること
第四十九回……四一三
白玉堂と智化が冲霄楼の迷路に陥ること
沈仲元が白・智両名を脱出させること
第五十回……四二一
白玉堂が官印を失って失踪すること
蔣平らが官印の捜索におもむくこと
第五十一回……四二九
蔣平が深泉より官印を捜取すること
白玉堂が冲霄楼にて惨死すること
第五十二回……四三六
公孫策らが襄陽王の刺客を捕えること
徐慶が玉堂の骨を盗出せんと図ること

第五十三回……四四六
北俠らが軍山に向けて旅立つこと
蔣平が旅店にて毒酒に倒れること
第五十四回……四五四
鳳仙姉妹が父を訪ねて蔣平と逢うこと
蔣平が水寨に潜入して徐慶を救うこと
第五十五回……四六三
蔣平が白面判官柳青と勝負を約すこと
智化らが鍾雄の水寨を探査すること
第五十六回……四七〇
鍾雄が北俠・智化と義を結ぶこと
智化が展昭と沙竜を救出すること
第五十七回……四七九
蔣平が智もて柳青を服せしめること
義俠らが鍾雄収伏の策を調えること
第五十八回……四八七
義俠らが鍾雄拉致に成功すること
智化が鍾雄の娘亜男を救出すること
第五十九回……四九六
武伯南が避難の途次豺狼にあうこと
艾虎が神樹崗にて鍾麟を救うこと
第六十回……五〇四
智化が鍾雄に大義を説ききかせること
英雄らが相携えて襄陽に復帰すること
『忠烈俠義伝』略図……五一三
解説……五一五

三俠五義

——忠烈俠義伝——

石玉崑述

鳥居久靖訳

第一回

劉妃が陰謀を設けて李妃を陷れること
余忠が替わりに死して李妃を救うこと(注一)

詩にいわく、

紛紛たる五代乱離の間
一旦　雲開きて復び天を見る
草木百年　新たなる雨露
書車万里　旧りにし江山
尋常の巷陌　羅綺を陳ね
幾処の楼台　管絃を奏す
天下太平にして無事の日
鶯花は限くる無く日高きに眠る(注二)

さても宋朝は、陳橋の兵変(注三)に、諸将、太祖を立てて君と仰いでこのかた、江山は一統され、相伝えて太宗の代、さらには真宗(注四)の代ともなれば、四海は波静かに万民は業をたのしむ、まことに雨風は順調、君は正しく臣は忠良なるめでたき御代。

そのある日の朝のまつりごと、文武の諸官、みなみな揃うたおりしも、弾正尹(だんじょうのかみ)にして天文博士を兼ぬる文彦博(注五)、列座のうちよりにじりいで、

「臣、よる、天象を案じまするに、天狗星(てんこうせい)（彗星）が宮居を犯しておりますゆえ、太子に良からぬことのあらむかと恐れます。星図一枚、書きあげましたので、つつしんで御覧に入れます」

と奏上、宮人(みやびと)の捧げる星図を受け取り、み机の上にひろげました。

みかどは、それを見終わると笑って、

「朕(ちん)がこの図を見るに、なるほど上帝が象(かた)を示しておられるようだ。がしかし、朕には太子は無いのだから、良からぬことのありようはずはない。卿(きょう)よ、まずは席にもどるよう、朕に成算がある」

かくて朝のまつりごとを終わり、諸官いずれも退出。内殿にもどった真宗は、なにか晴れやらぬ胸の内。ひそかに思うよう、

―皇后が亡くなってからというもの、久しく正宮をおかずにいるが、さいわい、李・劉、二人の妃がいま身ごもっている。上帝が象(かた)を示したもうたというは、あれたち二人の身に何事か起きるのではあるまいか――

そこで二人の妃を召そうとしているところへ、はからずも二妃、そろって御前にまかりいで、拝を終わってひざまずき、

「本日は中秋の佳節にございますので、わたくしたち、御園のうちに酒宴の支度をととのえまして陛下にお出ましを願い、今宵、月をめでつつ、夜もすがら歓を尽くしたいと存じまする」

と言上した。みかどは、いたく喜び、すぐさま二人の妃とともに御園におもむいた。

おりから秋のけはいのさわやかに、菊花のかおりたちまようところに、秋風さえ、さえざえと渡って、いつか心もはればれとなごむ思い。真宗は、秋色をめでつつ宝殿に進んで御座につけば、かたわらにはべるは李・劉の二妃。宮女が茶をたてまつったところで、みかど、

「今日、文彦博から言上があった。かれの申すようは、いま天狗星が宮居に尾を引いているから太子にさわりがある――朕は目下のところ、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

世継ぎはないけれども、喜ばしいことに、そなたたち二人とも身ごもっている。行く行く、どちらが先になるか、また男女の別も知りがたいが、天が、そうしたきざしを示したもうたからには、わたしは、そなたたち二人に、それぞれ御印と袱紗とをあたえて天狗星のさわりを封じようと思う。またわたしは一対の金のたまを所持している。その中には九曲の真珠一つがおさめてあるが、それは父君から賜わったもの、無価の宝であって、わたしは幼いころから肌身離さず持っておった。いま、それぞれに一つを授けるによって、そなたたちの姓名と宮の名とを表にほりこみ肌身に着けて所持したがよい」

李・劉の二妃は、お礼を申しのべる。みかどは金のたまをときはずし、侍従長の陳林に、「尚宝監（宝璽・印章をつかさどる官）に持参、即刻、文字をほりこませよ」と命じた。

二人の妃は酒をはこばせ、座に着いてみかどに進めまいらせれば、たちまち鼓楽こもごもに奏せられ、わざおぎたちの妙技は、あますところなく繰りひろげられる王室のめでたさ、今さら説くまでもない。

夜ともなれば月は空にかかって御園いっぱいま昼のよう。みかどと妃たち、興いよいよつのって、ともどもにめで楽しむ。またたく星々、とび交うさかずき――。

みかどがほろ酔い機嫌となったころおい、陳林が金の玉を捧げて跪坐しつつ御前に差しだした。みかどが受け取って、とくとご覧になると、そのおもてには、一つには「玉宸宮李妃」、いま一つには「金華宮劉妃」とほられている。その彫りはすこぶる精巧。

みかどは大方ならず喜び、即座に二妃に賜わった。二妃はひざまずいて拝受、仰せのままに肌につけたあと、てんでに金のさかずき三杯をたてまつる。みかどは、すすめられるまま、一気に飲みほすと、われにもなく大酔、大声でうち笑い、

「二妃のうち、太子を生んだ者は皇后にとり立てるであろうぞ」

二人の妃は、ふたたび礼のことばを述べるのであった。

みかどが酔いにまかせて口にしたこのことば、さして重大とは考えなかったものを、思いきや果てしなき風波のたねになろうとは！

それは何故とおぼしめす。

事はみな劉妃の心ばえ悪しきによるもの。妃は、李妃に対し、かねてねたみ心を懐いていたが、いま、このことばを聞くと、李妃が太子を生んで皇后に立てられることを、ひたすら恐れた。その日、後宮にもどった劉妃は、すぐさま、宮内長官の郭槐と、李妃を殺害すべく、ひそかにはかりごとをめぐらしたのである。

おもいきや、かたわらにいた一人の宮人、その名を寇珠といい、劉妃の御用をつとめる侍女。かの女は劉妃の腹心ではあったが、まっすぐな人柄、日ごろから忠義の心にあつかったので、劉妃と郭槐のたくらみを見て、すこぶる不愉快。それからは、何事にまれ注意を怠らず、ひそかに様子をうかがっていた。

劉妃の命をうけた郭槐は、腹心の従者をやって、尤というとりあげ婆をだきこんだ。尤婆はひたすらおそれかしこんで、事のついでに、自分の亭主をも郭槐に頼みこみ、これまた福男にしてもらったことである。

そしてある日、郭槐は尤婆と密談、劉妃が李妃を殺害せんたくらみをもつむね、くわしく話して聞かせた。聞いて、さすがの悪女も、はじめはしぶったが、

「もしうまく成功すれば、そなたは無限の富貴をうけることができるのだ」

と郭槐にいわれて、つい有頂天になってしまい、寄せる眉根に浮かぶは計略、即座に郭槐に向かい、「かくかく……しかじか……」と告

げれば、郭槐、聞いて、
「うまい、うまい。それがほんとに成功し、行く行く劉妃が太子でもうけようなら、そちは稀代のてがらを立てることになるぞ」
そこで、その場にのぞんで事をしくじるまいぞとかさねていいふくめたうえ、あまたのかずけ物をとらせた。婆さんはほくほく顔でひきさがる。郭槐は後宮に出向いて劉妃にしだいを復命すれば、劉妃、ことごとく喜んで、ひたすら決行の時機を待つのであった。
光陰は矢のごとく、いつか三月、みかどは玉宸宮におもむき李妃を見舞った。李妃、拝をするのに、「あいさつは抜きじゃ」と、さっそくに、よもやま話のおりから、ふと、南清宮に住まう八親王の誕生日があすであることを思いだし、すぐさま侍従長の陳林に、
「御園にまいって果物をととのえよ。あす、八親王のご誕生日をお祝い申したいから」
といいつけた。陳林がかしこまって退出したそのあと、李妃は、両のまゆをきつく寄せ、にわかの腹痛にたえがたい様子。みかどは、すわ分娩と仰天し、ただちに駕をうながして後宮を出、劉妃を召して、産婆をともない李妃のもとへ出向いて御子を取りあげるよう指示を伝えた。劉妃は仰せをかしこみ、とりあえず玉宸宮に急ぐ。
一方の郭槐、ことを尤婆に急報すれば、尤婆、はやくも用意に手ぬかりなく、もろ手に櫃をささげて郭槐に手渡し、うち揃って玉宸宮にやって来た。
櫃の中味を何物とおぼしめす？
なんとそれは、かねて両人がしめし合わせたからくり。猫の生皮をはいだやつで、血だらけでテラテラと赤びかり、いかな怪物とも識別できぬ、いかさま正視にたえぬしろもの。両人は玉宸宮にはいったが、余人は食べ物でもあろうと思うだけ、中のいわくを知るよしもない。
あたかもよし李妃は分娩の最中。やっと産みおとしたとたん、にわかの出血で人事不省におちいった。劉妃・郭槐・尤婆の三人、さっそく、かねてのたくらみに取りかかり、ごたごたに乗じて猫と太子とをすり換えると、太子を御下賜の袱紗にくるみ、櫃の中におさめて、玉宸宮からかかえ出し、金華宮へまっしぐら。劉妃は寇珠をよんでいいつけた。
「太子を藤籠の中にかくし入れ、銷金亭へはこんで行って、もすその紐でしめ殺し、金水橋の下へ投げすてよ！」
寇珠はいなもうにもいなめない。他の者をやったら事はいっそうまずくなるおそれがあるからだ。やむなく、藤かごをさげて、まっすぐ銷金亭までかけつけ、急いで籠をあけて太子をだきあげると、うれしや、袱紗に包まれていたので、太子には何のさわりもない。ふところにだき入れて、ひそかに思うよう、
—みかどは中年までお世つぎが無く、やっと李妃が太子を産んだとおもえば、よこしまな劉妃がたくらみを設けて、なきものにしようとする。もし、わたしが太子を殺そうなら、もって生まれたわたしの良心はどうなる。ままよ、太子をだきまいらせて、ともに河の中におとも し、忠義の心の一端なとお尽くし申そう——
一歩、銷金亭をふみ出し、ふと見れば、かなたからやって来る者がある。あわてて身をひるがえし、窓ごしにじっとうかがう。
くだんの者は宦官のいでたち。手に宮廷用の櫃をかかえている。身には、おどり竜のぬいとりした紫のうすものをうがち、白高底の黒ぐつ、胸に数珠を掛け、左肩に払子をななめに插している。色白の顔に元気あふれ、両の眼がきらきらとかがやく。寇珠、見るより、すっかりうれしくなって、口の中で念仏をとなえ、
—しめた。いま、この方にお会いできたのは、太子のご寿命があっ

たというもの――

この人物は余人ならず、日ごろ忠義にあつい侍従長陳林その人であった。みかどの仰せで御園におもむき果物をとりそろえ、手に、金糸で竜を編みあげた化粧櫃をささげて、こちらにやって来たのである。陳林、見れば寇珠がふところに赤子をだいているので、そのわけをこまごまと尋ねた。寇珠が、そのいきさつを一とおり話すのを聞いて陳林、ひとかたならず驚いたが、それがいつわりでないことは御下賜の袱紗が何よりの証拠。

そこで両人協議のうえ、太子を櫃に入れてみると、どうやらおさまった。と、おりもおり、太子が泣きだした。二人はまたひそかに仏を念ずるのであったが、念じおわるや、太子ははたと泣きやんだ。寇珠は大急ぎで後宮にとってかえす。

陳林は手に化粧櫃をささげ、忠義の一念、わが身の生死など問うところでない、まっすぐ宮中にやって来たが、宮門をはいったとたん、郭槐にさえぎられた。

「おぬし、どこへお越しか。劉皇后さまが、おぬしに直接会ってたずねたいことがあるとの仰せでござる」

陳林は止むなく郭のあとについて金華宮に参向、化粧櫃をかたわらに置くと、かみてに向かってひれ伏し、

「おきさきさま、しもべ陳林、まかりこしました。何かご用のおもむきでも」

劉妃は一言も発せず、茶碗を手にして、おもむろに茶をすすっていたが、長いまをおいて、やっと口を開いた、

「そなた、その櫃を持ってどこへ行っていやった。おもてに御封がしてあるが、それはどうしたわけじゃ」

「みかどの仰せで、南清宮なる八親王さまのご誕生祝いの用意にと、御園に果物をとりにまいりました。御封は、そのためにございます。やつがれの一存でしたのではございませぬ」

劉妃は、化粧櫃と陳林とにちらと目をやり、かさねてたずねる、

「中に何かかくし物がしてあるの。正直に申すのじゃ。もし偽りを申せば、そなた、処罰されるぞよ」

陳林、こうなっては、死はもはや念頭になかった。度胸をすえると、憶するどころか、落ちつきはらって答えた。

「かくし物など決してございませぬ。おきさき様が、もしご信じないとあれば、御封をはがし、この場で中をおあらためくださりまするよう」

言いつつ、すぐにも御封をはがそうとする。劉妃、それと見るや、あわてておしとどめ、

「御封によってあけられぬようしてあるからは、誰も勝手にあけて見ることはできぬはず。そなた、まさかしきたりを知らぬはずはないであろうに」

陳林、叩頭して、「恐れいります」

劉妃は長いあいだ思いいれのていであったが、明日はたしかに八親王の誕生祝い。そこで、

「ならばさがってよろしい」

陳林、立ちあがって手に櫃をさげ、身を返そうとすると、やにわに劉妃の声、

「おもどり！」

陳林は、ぜひなくくびすを返す。劉妃は、あらためて陳林を上から下までながめまわしたが、その顔には、変わった色は毛すじほども見えない。おもむろに、「おさがり！」

かくて陳林は、かろうじて金華宮を出たのであったが、この時にな

って、心臓がどきどきと鳴っているのに気がついた。

宮門を出ると、そのまま南清宮にいたり、「御諚により参向」と申し入れる。八親王は聖旨をうけるべく内殿に入り、櫃を上座にそなえて、拝を終わった。陳林、すすめられるまま座についたが、たちまち、顔いっぱいにぽたぽたと涙をしたたらせ、もろ膝折って身を投げ出すや、声を放って大泣きに泣く。八親王、その有りさまに驚きいぶかり、「お守役よ、これはまあ何とした。話があるなら立って申したがよい」

陳林は左右にちらと目をやる。親王、それとさとって、「座の者、席をはずせ」といいつけた。

陳林は席に人無しと見て、事の一ぶ始終をくわしく申しのべるのに親王、

「そなた、たしかに太子だとどうしてわかる」

「現に御袱紗に包んでございます」

聞いて親王、急ぎ化粧櫃をあけて太子をだきあげて見ると、いかさま御袱紗に包まれてある。と、太子はおぎゃーと一声。それからは、せきを切ったように泣きたてる。それはあたかも何事かを訴えるかのよう。親王は、あわてて奥へだいて行き、陳林をも内へ呼び入れて、ともども、きさきの狄氏に会って事のしだいを一とおり述べ、三人協議して、太子をしばらく南清宮にあずかって養育し、朝廷のいざこざがおさまったあと、その処置を考えることにした。陳林は、お役のしだいをみかどに復命すべく、辞去した。

思いきや劉妃ははや、李妃が怪しの物を産み落としたことをみかどに言上していた。みかどはひとかたならず立腹、ただちに李妃を宮内のひとやにさげ住まわせ、劉妃を玉宸宮貴妃（宰相に匹敵する最高位の女官）に格あげしたのである。あわれや寄るべなき李妃は、こうしたすすぐに由なき罪とがをきせられながら、訴えよう者もなかった。が幸いにも、善人には天の助けとやら、ひとやの総元締、姓を秦、名は鳳なるもの、忠実な人がらで、日ごろから郭槐とは不和。はやくも、この事件のうらには、かならずや奸策ありとみてとった。いま、李妃のこうした有りさまを見るにつけ、なんともお気の毒、ご前に進んで百方慰める一方、若い宦官の余忠に、よくよくおきさきにお仕えして懈怠あるまいぞ、といいふくめるのであった。

この余忠という者、ふしぎなことに、その容貌が、李妃と生きうつし。加えて日ごろから、やることに男気があり、しばしば他人のために一肌ぬいでおのれをかえりみない。そのため、秦鳳は、いっそう可愛がり、ほんらい師弟の間柄ではあったが、その情愛は父子のごとくであった。余忠は、きさきのこうした苦境をみるにつけ、自分が身代わりになってさしあげたい気持でいっぱい、おりある毎に、なんとかしてお助け申したいとは考えるのであったが、その手だてを思いつかぬまま、手をこまねいているほかなかった。

さて劉妃は、かねてのはかりごとはみごとに成功、その喜びは一方でない。ひそかに郭槐と尤婆に莫大な恩賞をあたえるとともに、尤婆には、わが生む子をも取りあげさせることにした。

やがて十の月が満ちて生まれたのは、あたかもよし太子。奏聞におよべば、みかどの喜び、大方ならず、ただちに劉妃を正宮にのぼせて、そのことを天下にふれさせた。劉皇后の郭槐を遇すること開国の元勲さながら、尤婆は女蔵人頭にとりたてられ、寇珠は采女の正を命ぜられて、平穏無事な日がつづいた。

ところが、楽しみ極まって悲しみ生ず、六年ののち、劉妃の生んだ子供は、病にかかって、あえなくなってしまったのである。みかどはいたく悲しみ、

―中年になるまで世継ぎがなく、やっと太子をもうけたと思えば、なんと幼くして死んでしまった。これが平気でおられるものか――

と歎くのであった。かくて傷心のあまりまつりごとを見ぬ日が幾日もつづいた。

そのある日、八親王がお見まいのため参内した。みかどは親王をお側に召され座をすすめて、つれづれの茶ばなしのあいだに、

「ご子息は幾人おられる。年はいくつ」

とのおたずね。親王は逐一それに答えたが、三番目の御子は、あたかも劉妃の生んだ子供と同じ年かっこう。聞いてみかどは顔をほころばせ、「今すぐ会いたい」との仰せで、三の御子が参内、拝謁するのを、みかど一め見て、思わずこみあげる喜び、いっそうふしぎなのは、その容姿、立ち居ふるまい、ご自身と少しも変わらない。みかどの病は、うれしさで一ぺんになおってしまった。すぐさま、三の御子を世継ぎとさだめ、皇太子に立てるむね仰せ出される一方、陳林に、太子を劉皇后にお目見えさせ、後宮をも案内するよう命じた。

陳林は仰せをかしこみ、まず皇后のお住い昭陽院に参向、言上した、

「みかどは八親王の三の御子を東宮太子に立てられましたにつき、やつがれに、お目みえさせよとのことでお伴してまいりました」

太子が拝礼を終わったところで、劉皇后、太子を見ると、みかどに生きうつし。心中ひそかにいぶかしむのであった。陳林、まだこれから各後宮をご案内いたさねば、というので劉皇后、

「それならご案内申したがよい。すみしだい、ここへ来るのじゃ。なお話があるほどに」

陳林はうけたまわって太子を各後宮に案内した。

ひとやの前を通りかかった時、陳林、

「このひとやは、化けものをお生みになったというかどで、みかどが李妃さまをおしこめられてでございます。李妃さまは、いちばんにお賢くて徳のある方でございました」

太子は、化けものを生んだという話は、そのまま信用する気にはならなかった。が、それが、わが身に関することであろうなどとは、つゆ知るよしもない。

なかへはいろうとしているところへ、おりよく秦鳳が出てきた。陳林は、日ごろから秦鳳とは大の仲好し、太子すり換えのいきさつは、すでに内密に話してあり、今お連れした八親王の御子が、その太子であると告げれば、秦鳳はこよなく喜ぶのであった。秦鳳は、まず太子に拝礼、二人を李妃のもとへいざなった。一め見た太子は、いつか顔いちめんの涙。これなん、天性の母子の情というものであろう。が、それと見た陳林は心中うろたえた。急ぎ太子をうながして劉皇后の正宮にもどって来た。

そのとき劉皇后は、部屋で鬱々として考えこんでいたが、はいって来た太子の顔にある涙のあとを見とがめ、「どうして泣きやった」とたずねる。太子はかくし立てはしない、

「さっき、ひとやの前を通ったとき、李妃のやつれた姿を見て、可愛そうでならなかったのです。どうか母君さま、おりがあったら父君にようくお話して、あの人を明るいところへ出してやり、わたくしが悲しゅうないようしてくださいませ」

そういいながら頭をゆかにすりつけた。聞いて劉皇后、心中ぎくっとしたが、なに食わぬ顔。急いでだき起こし、口だけほめて、

「なんとまあお情ぶかい殿下。なんにも気にかけることはありません。おりをみて父君によう申しあげますよ」

太子は陳林にともなわれ東宮にもどって行った。が、劉皇后、それを念頭から棄てされようはずはない。ひそかに思うよう、

—さっき太子がはいって来たとき、ふと見た顔は、どこか李妃のおもかげがあった。それに李妃にあったあとで、わたしに憐れみを請うはずもない。これは、どうもおかしい。六年前、寇珠にだいて連れ出させたが、くびり殺しもせず、金水橋の下に投げすてもしなかったのではあるまいか——

そこでまた考える、

—あの時、陳林が化粧櫃をさげて御園からやって来たが、寇珠の一存で太子を陳林の手に渡し、持ち出させたのではあるまいか。これをはっきりさせるには、どうでも寇珠めを痛ぶって問いただし、事をはっきりさせねば——

考えるほどにいやます疑惑の念、さっそくに寇珠を呼びつけ、衣類をはぎ取り、拷問にかけたが、答えは当時のことばと一言一句もたがわない。劉皇后、いよいよ腹を立て、今度は陳林を呼び出して対決させたが、両人のいうところは、やはりひとつ。劉皇后、心中いらだって、

—ここは毒をもって毒を制するにしかず。陳林の手で拷問させることだ。かれら二人がやった仕事、一人が痛いめにあうのを、まの当たり見ながら、口を割らぬというはずはない——

そこで陳林に刑棒をとらせ、寇珠を拷問にかけた。劉皇后のしうちは、かくは残忍をきわめたが、思いきや、覚悟のほぞを固めた寇珠には、死はもはや念頭になかったのである。

あわれや寇珠は、女の身のかよわさ、打たれたからだは完膚なき有りさまとなりはてたが、それらしいことは一ともいわぬ。処置に困じはてているおりから、陳林に、すぐ出頭せよとのみかどのおさた。劉皇后、ひまどって馬脚をあらわすことのあってはと、やむなく陳林を引きとらせた。

寇珠は、陳林の去ったいま、おそらく劉皇后はこのままではすますまい、小刻みに痛ぶられるより、いっそ一思いに死んだがましと、手すりに頭をぶっつけて、われとわが命を絶った。

今はやむなしと劉皇后は、そのかばねを宮外にかつぎ出させた。それと見た小女、日ごろ寇珠の気に入りであったのが、こっそり玉宸宮のうしろに埋めた。

劉皇后は、故なくして宮仕えの者を打ちすえ脅迫して自殺に追いやったわけであるから、みかどに言上することも、それ以上、ことを追究することもはばかられた。

かくて劉皇后は、真相がつかめぬまま、そのねたみ心を深めるのであったが、それは回りめぐって李妃への恨みとなって念頭を去らず、ひそかに郭槐と協議、内々に李妃の落度をさがし、どうでも亡き者にしようと考えたのは、さもありそうなこと。

さて一方の李妃は太子に会ってからというもの、毎日、悲しみにひたっていたが、さいわい秦鳳が手を尽くしてこれを慰め、事のよしを仔細に語って聞かせた。李妃は、はじめて夢からさめたよう、大方ならず喜んで、毎夜、香をたいて太子の無事をいのるのであった。

思いきやその事は、悪人ばらの探知するところとなった。ひそかにみかどに奏上するよう、

「李妃は恨み心から、毎夜、香をたいてまじないをやっております。心に良からぬたくらみある様子、すておいては一大事にございます」

みかどは激怒し、七尺の白絹をあたえて、即時、死をたまわるむねのおさた。

ところが、はやくもその事を、こっそりひとやにもたらした者があった。秦鳳、それを聞くや、たましいを飛ばせ、あわてて李妃に知らせれば、李妃は聞くなり、その場に気をうしなってしまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com